

ずいぶん異なるものになるだろう。住居内部と外部に対する空間領域の連続性は、過密なわが国の都市生活だからこそ是非実現させたい。また実行したいものである。

日本は一応物の豊かな国になったが、長期的視点をもった土地（国土）利用計画や住生活・生活環境の分野で

は海外に学ぶ点が沢山あると思われる。次の機会には家族の住生活・社会生活のあり方を、またどのような条件のもとで外部空間を配慮することが可能となるのかを、住居内にはいつて調査してみたいと考えている。

（群馬女子大学）

還 暦 前 後

濱 英 彦

東京で小学校6年、中学校（旧制）5年プラス浪人1年を過ぎて、高等学校（旧制）の3年間は松本でアルプスを眺めて暮し、東京へ戻って大学3年間を終えると直ちに人口問題研究所（厚生省）へ勤めて31年が過ぎ、そのあと成城大学へ移って4年が経過しようとしている。かくして本年還暦に達する人生60年の生活も数行にしてつくる。この間にももちろん戦争の大事があり、思い起すことも多いが、今ここに至って一番に印象的なことは国立研究所と私立大学とでの生活のちがいである。前者は中央官庁の付属機関として組織的なタテ割り社会を基本とし、後者は私立大学として個性的なヨコ並び社会の典型だと感じている。対照的な2つの職場をみずから渡ってみて、いずれの生活も自分自身のわがままを基準としてみて一長一短、まことに興味深い。具体的なことはどちらからもお叱りを受けるので、口のなかでつぶやくにとどまるが、それにしてもなぜ大学へ移ったのかと人にきかれ、みずからにも問い、その公式的な回答は研究の原点にもう一度帰りたいなどと恰好のよいことを一応は云ってみるが、ほんとうのところはあの長い長い夏休みが何とも欲しいという即物的な願望が一番先にあった。しかしいざ手に入れてみると、その夏休みがさっぱり生きないのは、やはり次元の低い願望のせい、または夏休み体験不足のせい、とはいえない。いまや大学へ移って4年が過ぎ、生活切換えのごときモラトリアム期間も終り、かつ還暦にふさわしく何ごとかを再出発させたい、

させるべきだと寝ころがっては思いを馳せる。

ところがかつて人生50年、実際には男子46歳、女子49歳の戦前時代には60歳はすでにプラス10年以上を経過し、めでたきよわいがあったかもしれないが、いまや人生80年の時代ともなれば、このあとまだ20年を残すということであって、とてもめでたいなどと云ってはいられない。ただし生命表をみると、1985年に男子60歳が20年後——それはもう21世紀だ——の80歳までに生きる生存確率ともなれば、およそ46%、半数を切るなのであって、これはいささか気を悪くするデータである。そういう20年をにらんでの再出発は1年1年を積みあげる心がけが大事というべきだが、ほんとうのところ年をとると体力・気力・知力・経済力などすべてにわたって個人差が大きくなるのであって、平均値的な発想や対応はあまり有効でない。もっとも研究者稼業・経済力に関するかぎり青年期から低水準のままであるが、困ることは思考の源泉となる気力・知力といったものがこれからどの程度に落ちてゆくものか見過せないことだ。近ごろ家のなかで何か用があって別の部屋へゆき、何の用か思い出せないことがふえ、少し年上の先生にそのお話をしたところ、そんなことはしょっちゅうありますよという御返事で大いに意を強うしたが（?）、ともあれ還暦からの再出発とあれば、このようなおどろおどろしき気配には素知らぬ顔をして、まずは再びあくなき好奇心を内側に燃やして前進のエネルギーとすることが肝心と私自身思い込んでいる。

（成城大学）

地球システムの立場からみた地学

浜 田 隆 士

学問の進展が専門分野の分化と深化とに支えられ、今日の近代科学隆盛を生むに至ったことは、否定仕様のな

い現実であり、歴史的経過である。ところが昨今、総合の時代、量から質への転換期、などと唱えられ始めてい

る。大局的には分化・深化とは全く逆のセンスである。これまでは、確かに単純・理想を目ざして、せまく鋭く物事を解析するのが第一義にあげられてきた。複雑・混沌は未分化・原始の範疇にあり、場合によっては悪でさえあった。わが国で自然史の学がついに成立し得ないでいるのは、この思考構造のせいであろう。

広義の地学、つまり天文学、地質学（地質科学）、地理学を包括した分野がどうあるべきかの検討は、高校・大学のカリキュラム、専門研究分野の現在の在り方に関わらず、非常に大切であろう。とりわけ、これらの分野のひろがりともまとまりが果たして一つの学問体系をなすかどうかという点については不可避である。地質科学と地理学とは共に地球事象を対象にした自然史科学であるから共通点が多い。地球学としてでもくくるとは十分できよう。いっぽう、天文学と地質科学は、地球を惑星としてみる最近の視点からすれば、生命の発生が宇宙空間で普遍的であるという命題を含めて非常に密接であるといつてよい。まして、銀河系と太陽系の回転の相対関係や隕石衝突と生物の大量一斉絶滅などの符合がもっと詳しく吟味される局面を考えると、やはり両者は不可分の関係にあるとみてよい。

ディテールに立入ることはできないが、三つの分野の共通項は、一つは複雑機能体を対象にすることであり、第二に時間経過に伴う諸種の変化を重要視することである。不可逆の実時間を軸にした歴史科学であると云いかえることもできる。開放系であるための非線形性、非平衡性が著しいことを特徴にあげてもよい。それだけに、こうした総合性、全体性の卓越する事象の取扱いには、ある意味で理想化・単純化の発想に立つ数学・物理学・化学・生物学のディシプリンを、個別に単純に適用する

アプローチには危険性がつきまとうことになる。地学という分野は、本質的にマクロスコピックな観点を欠くことができないのであり、学問の分化・深化の傾向はしたがって、地学をそのものの存在を否定するセンスをもつことになってしまったといえる。

ここで、もう一度ふり返ってみたいのである。地学が、地球という対象故に成り立つのであれば、そのアプローチにどのような自然科学のディシプリンを使おうと、いかにミクロスコピックに眺めようと、地球システムの中の事象を扱っているという認識上のフィードバックがかかってしかるべきであろう。あるいはもっと正確には、総合性・歴史性という点を主眼にした、したがってありのままの複合体をこわさない“解析”のしかたを適用すべきものである。ところが、複雑機能体を扱う総合科学には理念はあっても手法が確立されていないといわれる。

しかしながら、それは multidisciplinary ないしは interdisciplinary な発想どまりの思考だからであって、transdisciplinary ないし supradisciplinary な立場を容認すれば、局面は大いに違ってくる筈である。もちろん従来の個別に詳しい手法も尊重し併用しなければならない。総合を本当に求めるためには、いまのところシステム科学の発想が最も妥当にみえるが、地球システムには多様な階層性と長大な時間経過を含んでいるので、工学システムや抽象システムのアプローチでなく、自然システムとしてブラックボックスをにらみながらの研究が中心となろう。旧来の専門分野の成果をふまえ、システム科学の手法をアプライすることこそ、地学を基礎科学分野の集合とみない正しい扱いでないかと思う。

（東京大学）

テレビのルポ番組に思う

宮口 侗 逸

最近、テレビ番組の中にルポルタージュ風のものが増える時間が増えてきた。それも、テレビ局所属の記者やカメラマンによるものが多くを占めてきた。世の中が画一化していけばいくほど、多数者の日常生活に比して何らかのユニークさをもつ存在を伝えることは、人間の持つさまざまな可能性を示してくれる点で大きな意味がある。しかしその伝え方には考えさせられることが多い。

取材の対象になる場所は、都市の平均値的な生活者に

とって、そこに到達するのに何らかの困難を伴うか、そこに滞在するのに多少の不便をするというような場所が多い。絶海の孤島とか、文余の雪に埋められている山間とか、零下30度に達する場所というようにである。そして、そういう場所においてしっかりと仕事をし生活している人たちの持つユニークさを伝えるのが、ルポの目的であるのは当然である。

ところが近ごろの放送では、まずそこへ取材に行った記者とカメラマンの名前と顔がまずあらわれ、前おきと